

大和文華館の四季 (その1)

大和文華館館長 石澤 正 男

「美のたより」の第2号に矢代前館長の「文華苑の輪郭」という一文がのっております。それを読んでいただければ、大和文華館は単に「美のための美術館」（美のたより第1号）としての構想に止まらず、文華館をとりまく敷地全体を、野趣に富んだ自然美が四季それぞれに味えるようにしたい、それでこそ文華館はほんとうに美術鑑賞の場になるのだ、という意図がよく理解されるだろうと思います。そこでこの号から何号かにわたって文華館をとりまく自然の風物誌とでもいうべきものをお伝えしてみることになりました。

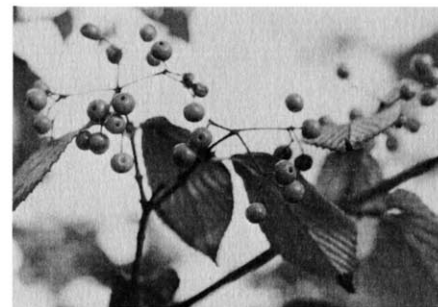
四季といえは、もちろん春夏秋冬のことですが、それでは四季の区切りをどこでつけるか、例えば春はいつから始っていつ終るのか、そして夏は？、秋は？、と問いつめられると、それに答えるのはそうたやすい問題ではありません。日本では明治5年に陰暦を廃して陽暦を採用しましたから、陰暦の四季はここで触れる必要はありません。ただし昔の詩歌ばかりでなく文学、美術を正しく理解するためには陰暦による四季をいつも念頭におく必要があることだけは、蛇足かも知れませんが、つけ加えておきます。

そこで問題になるのは天文学的な四季と気象学的な四季のどちらをとるかということになりますが、好都合なことには気象学的な四季と陽暦の四季（もちろん北半球の場合です）とは一致していますの

で、ここではそれに従うことにします。すると春は3、4、5の3ヶ月、夏は6、7、8、秋は9、10、11、冬は12、1、2のそれぞれ3ヶ月ということになります。この19号が皆様のお手許に届くのは12月に入るのでしょうから、差し当り冬の季節から始めることになります。そうすると10月末の今から11月にかけて丁度見頃になる草木の紅葉も12月にはほとんど残らずなくなり、これからそろそろ見頃になる山茶花も大分盛りを過ぎてしまいそうです。今ならば温い天気の良い日には陽溜りでよく鳴いているこおろぎ類も大方声をひそめているでしょうし、今ならまだ少しは生き残って鳴いている松虫は完全に姿を消しているに違いありません。秋の虫の音がたえると、いよいよ冬の季節に入ります。花の終わった萩の葉がだんだん黄葉してゆくのも中々風情のあるものですが、12月には萩も芙蓉も翌年よい新芽を出させるために株の根元から刈りとりてしまいますので、文華館の門から玄関までの坂道の両側が急にもの淋しい景色になります。一昨年までは文華館の松山全体に生い茂っていた根笹が12月頃までは実った稲穂を想わせるような豊かな色がね色を見せてくれました。それが1月に入ると急に色あせて乾いた灰色に変わります。毎年その頃から根笹を全部刈りとることにしていました。これは中々大仕事ですが、文華館としては一番恐れている山火事を

防ぐためと笹百合や山百合を始め蕨その他の可憐な野の花を保護することも目的の一つでした。ところが昨年は大和一带の竹類に花が咲き実がなるとい珍らしい現象が生じました。お気づきの読者も沢山おられることと思いますが、文華館の松山も例外ではありませんでした。ただ文華館の根笹はすっかり刈りとりてあったため根元から高さ10㎝位の新芽がのび、その先に花をつけ、それで立派な実がなりました。親株は話に聞いていた通り枯れてしまいました。これに似た現象を、私は30余年前に箱根の芦の湖附近で見ましたが、その時は笹の実を食いに集った鼠の大群があたり一面に折重なるようにひしめき合っているのを見て身の毛がよだつ思いをしたのを覚えています。昨年の笹異変に野鼠の横行のなかったことは非常に仕合せでしたが、とにかくこんな異変は何十年間に一度位しか起きないことなので特筆しておいてよいでしょう。それで根笹が根絶やしになれば後の世話が省けて好都合だと思ったのですが、無数の笹の実には鼠にも食われず、地に落ちて若笹となり、今では10㎝余りに育っています。このままにして置けば10年もしたら元通りになるのかも知れません。この笹異変で百合その他の野の花が目立って元気がよくなった代り、一方では薄が猛烈な勢で繁茂しすぎて、これが今では新しい頭痛の種となってきました。

12月に見られる花としては前にあげた色とりどりの山茶花と白い八手の花位のものですが、花に代って、小鳥ばかりでなくわれわれをも楽しませてくれるのはいろいろの木の実です。種類を挙げますと、まずルビーやさんごにも劣らぬ美しい、がまずみ、花みずき、うめもどき、なんてん、そよご等の赤い実の他にピンクの外套をきた真赤なまゆみ、黄いろのせんだん、地味な南京はぜやうつぎ、しゃしゃんぼの黒ずんだ実などがあります。冬になって木の葉が落ちた木々の枝には小鳥の姿がよく目につくようになります。冬の鳥としては小形のものでは、めじろ、うぐいす、じょうびたき、かわらひわ、えなが、しじゅうから、ほおじろ、せきれい、もず。中形では、ひよどり、きじばと、つぐみ。もう少し大形のものとしては小綬雛（こじゅけい）位でしょう。雀や鳥はもちろん沢山いますが、晩秋に池の水がほざけている時は白鷺が何羽も集ってきているのに気がつきました。冬枯れの山林で小鳥の声をきき、その姿を観察するのも楽しいものです。それには冬が一番適当な季節ですが、場所としては文華館の周辺は中々恰好なところですよ。ご希望の方は、どうぞ少し気永にかまえて、可愛らしい小鳥をおどろかすような仕草をせずに、ゆっくり観察するようにお願いしたいと希っています。（10月31日誌す）



がまずみ



まゆみ



さざんか

季刊 美のたより No.19

昭和46年12月1日

発行 大和文華館